

【報告】

垂水島津家墓所を清掃

— 垂水市文化協会とともに —

令和2年11月6日(土)、国指定文化財の「垂水島津家墓所」の清掃ボランティアを行いました。

今回は垂水市文化協会の皆さんも応援に駆けつけて下さり、約20人のボランティア活動により、大雨で裏山が崩れた上段部分を除き、すっきりきれいになりました。

また、ボランティアの一部は「殿様水」や「第6垂水丸慰霊碑」前へも出かけて、草払いを行いました。

垂水麓のお長屋とともに、歴史愛好家の方々がたくさん垂水島津家墓所を訪れてほしいものです。



第37回 垂水高校 史蹟めぐり

令和2年11月13日(金)、垂水高校の恒例の「史蹟めぐり」が行われました。

この「史蹟めぐり」の目的の一つには「地元の先人たちの実績をたどること、郷土についての認識を深めつつ、今の垂水市、今の自分が存在する意味やこれからの未来について考える」とあり、コースは3つ用意してあります。

今回は高校から新城方面にむけて約23キロメートルを歩く、一番長いコースでした。全学年の生徒104名が学年ごとに進んでいきますが、先生方はコースの途中／＼で安全確認のために立哨をしています。

史談会からは川崎あさ子、山田義之、そして瀬角が説明者として参加しました。

終原貝塚、震洋丸基地跡、終原公民館でのおろごめなどを説明しましたが、高校生たちが少しでも郷土史や文化財に興味を持つきっかけになればと思います。



第2回ノルディックウォーキング

— in 垂水探訪 —

令和2年11月20日(金)、垂水市包括ケア支援センターのノルディックウォーキングがあり、午前中、垂水麓周辺を訪ねて歩きました。

ノルディックウォーキングは健康寿命を延ばし、体力増進を目的に「楽しく」歩く取り組みです。史談会から瀬角が地域の説明者として参加。お長屋、垂水島津家墓地などを経て、約2、5キロメートルのウォーキングでした。



【研究ノート】

「辨才天」扁額

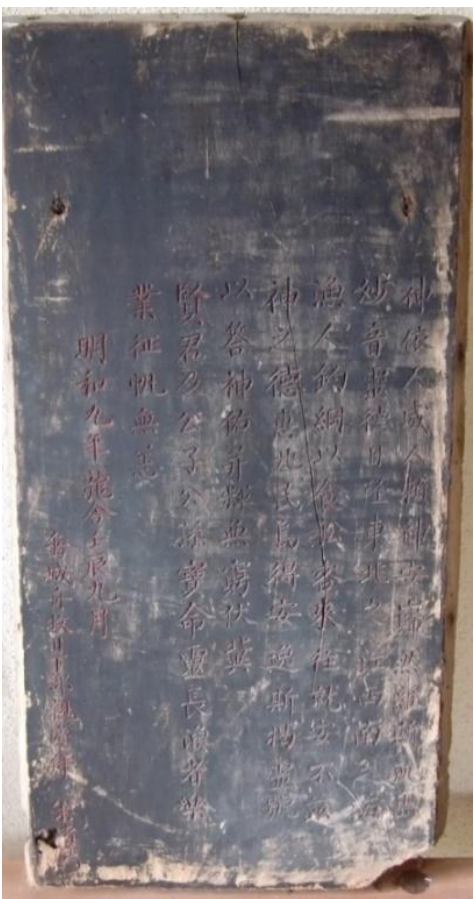
— 普原神社蔵 垂水市海潟



瀬角龍平

海潟の普原神社(天神)所蔵の木製(樹種は不明)の扁額である。江之島にはその昔、辨才天の社があり、その鳥居に掲げられたものであろう。社はその後、普原神社に合祀されたが、扁額もこの時に移されたと思われる。扁額の裏には明和九(一七七二)年、垂水島津家の家臣・八木諸兵衛(日

下部姓)撰により、垂水島津家第九代貴備(たかとも)の長命や豊漁、船の安全などを祈願する文章が刻まれている。



【転写】

【表】

辨才天

登龍敬書



【裏】

神依人威人頼神安巋然維斯孤島
妙音靈德日隆東北之江西南之海
漁人釣網以食船客來往就安不茲
神之德惠兆民鳥得安逸斯揭靈號
以答神佑并輝無窮伏冀
賢君及公子公孫寶命靈長漁者樂
業征帆無恙

明和九年龍舎壬辰九月
垂城舟牧日下部親慶拜 八木諸兵衛

【読み下し】

神は人に依りて威く、人は神に頼りて安んず。巋然たるかな、維れ斯の孤島の妙音の靈德は日ごとに隆く、東北の江に、西南の海に人釣網して以て食ひ、船客來往して就ち安んず。茲れ神の德恵ならざれば、兆民鳥ぞ安逸なるを得んや。斯の靈號を掲げ、以て神佑に答へ、并せて無窮に輝かさん。伏して賢君及び公子公孫の寶命・靈長、漁者の業を楽しみ、征帆の恙無きを冀ふ。

明和九年龍舎壬辰九月

垂城舟牧、日下部親慶拜 八木諸兵衛

【注】

○登龍・不明。○依・寄り添うこと。○威・猛々しく威厳があること。○巋然・高くけわしいさま。○孤島・江之島。○妙音靈德・弁才天の靈妙な恩徳。妙音天は弁才天の異称。○東北之江・江ノ島の対岸から東北に湾曲した和田の浦。○西南之海・西南に広がる錦江湾の海。○釣網・魚を釣り、網でとらえること。網は網に通ずる。○德惠・めぐみ。いつくしみ。○兆民・多くの民。万民。○靈號・尊い名号。○神佑・神が人々を助けること。○賢君・垂水島津家第九代貴備。○寶命・實は天子や領主等に関することに冠していう敬語。領主の長命をことほぐこと。○靈長・幸運が長く続くこと。○征帆・遠く行く舟。旅の舟。○明和九年・一七

七二年。○龍舎・歳次。とし。○舟牧・船のことを取り扱う役人。○諸兵衛・「諸」の部分の判りづらいが、『垂水市史料集(十四) 垂水の諸家略系図』の八木家の条を参考に推定した。

【口語訳】

神は人々によりそうことで威厳が備わり、人々は神を頼りにすることで安堵するものである。

巋然としていることよ。まさにこの孤島(江之島)の弁才天の靈妙な恩徳は、日ごとに高く、そのため、東北方の入り江(和田の浦)や、西南方の海(錦江湾)において、漁民は魚を釣り、網で捕えて暮らし、船客は海を往来するのに、安心出来るのである。これが神の慈しみでないことには、人々はどのように安心して楽しむことが出来るようか。

この尊い(辨才天の)名号を(鳥居に)掲げて神の助けに応えるときともに、(辨才天の名を)永遠に輝かそうと思う。

伏して賢君・貴備公、及び公の子孫の方々のご長命や長いご幸運、そして漁民がその業を楽しみ、旅ゆく船が無事であることを願うものである。

【名所旧跡を訪ねて】・殿様水(とのさまみず)

旧垂水城は、シラス台地の特徴を生かした南九州の典型的な山城で、国道220号線の北迫橋バス停から北東の山の上にあります。

山城はシラス台地が先が突き出た形の、見通しの良い場所(野首といいますが)を選んで作られています。



この垂水城跡の西側の麓にはきれいな水が

こんこんと湧き、『殿様水』と呼ばれています。名称の謂われは判りませんが、垂水城の殿様が飲んだかのも知れません。また、昔から道行く人々や野山を駆け巡る悪童たちののどをうるおしたことでしよう。

『垂水市史上巻』や「ふるさとの歴史垂水編」(中島信夫著)によると「垂水城のシラスの崖下からは、清水が湧き出して来るので、この出水にちなんで、「垂るる水」から「垂水」という地名が起ったといわれ」るようになった、とも記されています。



たるみず春秋

寂しきの太らぬうちに落葉焚く 森早世子

冬は厄介だ。油断をすると、寒風と一緒に寂しさがするりと心に忍び込んでしまう。

そして寂しさは映画を観ても買物をして、どんどん膨らんでいく。だから冬の兆しが見えると焚火をするに限るのだ。

庭の落ち葉を掃き寄せて火をつける。炎に手をかざすと、ほのかな温もりが、手のひらから心の中に充満していく。

(文章:瀬角龍平)